



大阪ブランド戦略

# 大阪が愛し育てた伝統芸能

～知恵と工夫と才覚次第、実力で磨かれた大阪の芸能～

大阪ブランドコミッティ

伝統芸能パネル

## 目次

はじめに .....	1
第1章 ブランド資源としての伝統芸能 .....	1
1 《能 楽》 大阪は能楽第二のふるさと .....	1
2 《文 楽》 『忠臣蔵』は道頓堀で生まれた .....	2
3 《歌舞伎》 回り舞台を発明したのは大阪の歌舞伎 .....	4
4 《地 歌》 三味線音楽は堺から発展した .....	6
5 《上方舞》 優美で上品でユーモラスな大阪 .....	6
6 《落 語》 庶民が伝える生き方の知恵 .....	7
第2章 伝統芸能を生かした PR 戦略 .....	8
1 大阪の伝統芸能の過去・現在を見つめる雑誌『上方芸能』 .....	8
2 大阪の伝統芸能を日常の中に .....	8
まとめ .....	9
資料「各芸能の概要」 .....	10
伝統芸能パネル構成メンバー .....	11
【参考】 大阪ブランド戦略について .....	12

〔はじめに〕

蓮如による石山本願寺の建立を前史に、豊臣秀吉によって本格的なまちづくりが始められて以来、近世年間の大阪は水の都、天下の台所として大きく発展した。長く平和が維持されたことと、経済の発展が、大阪に豊富な文化を花開かせる基盤となった。

町人のまち、商いのまち、大阪。そこでは人に信頼されることと、人に勝る創意工夫こそが成功への必須条件。演劇文化も商業行為のひとつとして、それを体現した。一方で商業演劇に携わるプロとは別に、たしなみや楽しみとして芸能に親しむ市民も多かった。

舞台芸術を作り出す人、鑑賞する人、趣味として実践する人、さまざまな形で大阪の伝統芸能は生まれ、現在に伝えられてきた。他にも民俗芸能として、四天王寺雅楽や能勢浄瑠璃、河内にわか、祭礼に伴う諸芸能が、地域の人々を中心に伝承されている。京都や江戸・東京とは異なる個性を見せる大阪の芸能文化は、そのまま大阪の特質であり、誇りでもある。改めてそれらを明らかにし、大阪人共通の財産とし、PRの素材としたい。

## 第1章 ブランド資源としての伝統芸能

### (1) 《能 楽》 大阪は能楽第二のふるさと

我が国を代表する伝統芸能で、雅楽を除き、公開して行われる舞台芸能として最も歴史のあるのが能楽。2001年にはユネスコから世界無形遺産の宣言を、日本の芸能として最初に受けている。

能楽は中世初期に京都の周辺地域で発生し、室町時代に京都で発展した。しかし、その後の戦国時代に衰退、存亡の危機に見舞われる。それを再興したのが豊臣秀吉だった。秀吉は天下を統一すると、能楽界を再び盛んにするため経済的にこれを援助、自らも能を演じた。さらには、秀吉自身が主人公となる演目を作らせ、自ら主演している。秀吉の演能は大阪城を初めとして禁裏や大名屋敷などで行われた。

能には源平合戦を題材に戦いの空しさや悲しさを描くことで、平和の尊さを訴える一連の作品群がある。その他、子を失った母の悲しみや、夫を思う妻のやさしさなど、老若男女の喜怒哀楽を描いた人間ドラマと、神や鬼を主人公にした神秘的な演目とで成り立っている。

また、『住吉詣』『松虫』『長柄』『芦刈』『江口』など、大阪が舞台となった作品も多い。

近世年間、能楽は武家の式楽と定められる一方で、大阪の町人たちは嗜みとして謡曲を稽古し、女性たちも上方舞（後述）の中で能の演目からの移入作（本行もの）を楽しんだ。能楽は一般の人びとの暮らしの中にも息づいていたのである。

現在も大阪市内には能楽堂が数箇所あり、能楽師も数多く在住している。大阪城西の丸庭園では毎夏、「大阪城薪能」（読売新聞社主催）が開かれ、多くの市民によって鑑賞されている。また、能楽協会大阪支部も、毎年、生国魂神社で薪能を開催している。

大阪城近くの大槻能楽堂（当主は観世流職分のシテ方・大槻文蔵＝能楽協会大阪支部長）では、能楽普及のための公演（大槻能楽堂自主公演能）を定期的に行っている。その他、大阪能楽会館や山本能楽堂での公演も多い。



〔写真〕 太閤能『吉野詣』（シテ・観世榮夫 別シテ・大槻文蔵）  
撮影・森口ミツル

## （２）《文 楽》 『忠臣蔵』は道頓堀で生まれた

大阪を代表する伝統芸能と言えば人形浄瑠璃・文楽。（文楽は近代以降の呼称だが、便宜上、近世年間の事項にも用いることとする）文楽を大成させたのは演奏家の竹本義太夫と作者の近松門左衛門だ。義太夫は大阪生まれ、近松は越前（別説も）の出身。二人は若き日、京都で出会う。

一時期は行動を別にしながらもそれぞれが修業に励んで成長。再び、大阪・道頓堀の竹本座で提携する。二人が近世演劇である文楽で訴えようとしたのは人間の情愛だった。階級や境遇、年齢や性別を越えて、人が人としてもっている美しい心を伝えようとした。彼らは従来の歴史劇だけでなく、町人を主人公

にした『曾根崎心中』『冥途の飛脚』『心中天の網島』を初めとする作品を作り出し、演劇を庶民の文化として根付かせた。

次世代の作者や演者たちは、近松や義太夫の教えのもとに『菅原伝授手習鑑』『義経千本桜』『仮名手本忠臣蔵』などの名作を生み出していく。赤穂浪士の討ち入り事件を『忠臣蔵』の代名詞で有名にしたのは文楽が嚆矢であり、初演は道頓堀の竹本座だった（旧浪花座のあったところ）。

文楽は情を描く芸能である一方で、極めて複雑なストーリー展開で構成された理知的な演劇でもある。それは大阪人の知性、理屈好きな特質が生み出した成果だった。

たとえば、近松半二作の『本朝廿四孝』。文楽で初演され、歌舞伎にも取り入れられて現在も上演されている作品の場合。物語の中心である三段目の筋は入り組んで複雑。主な登場人物は軍師・山本勘助未亡人、その長男・横蔵、次男・慈悲蔵。母は横暴な長男を可愛がり、慈悲深い次男に辛く当たる。母は武田信玄の家来に嫁いだが、実家は長尾（上杉）謙信方。長男は密かに武田家へ仕え、次男は長尾家に仕えている。母の望みもそこにあった。しかし、三人は本望の達成のために、それぞれ本心を隠している。だから見ても初めのうちはわかりにくい、最後に謎解きが行われる。

なぜそのような芝居が作られ、演じられてきたのか。観客である大阪人が求めたからだ。

商業演劇として、観客を集め、興行を成功に導くために、近世の劇作家や演者たちは大阪、京都、江戸、三都の観客気質の違いを調べ、分析した。それによると、近世の大阪人は理屈が好きで、込み入った話を好み、自らを律する生き方を志した。理屈が好きなのも、人格を重んじるのも、それが商売の基本だからだ。町人学者を輩出した大阪は、芝居の世界でも理知的な作品を作り出していた。

商売は知恵と工夫と才覚次第。すなわち個人の力量、実力本位。それは上方芸能の世界にも通用した。現在も、伝統芸能界では世襲によって技芸を受け継いでいる分野が多い。そんな中で、大阪を代表する文楽は、創始以来、今日に至るまで、一貫して実力本位で通してきた。力量次第で役が付き、地位も名前も大きくなる。

文楽の名の起こりとなった高津に近い日本橋には、専用劇場である国立文楽劇場がある。太夫、三味線弾き、人形遣いの三業に携わる技芸員は約90人。そのうち人間国宝が5人。作品だけでなく、実力本位で受け継がれてきた技芸の質も極めて高い。現在は、国立文楽劇場で1月、4月、7～8月、11月の年間4回の本公演と、6月に高校生を主な対象とした解説付きの鑑賞教室が開催されている。



〔写真〕 文楽『仮名手本忠臣蔵』（吉田玉男の大星由良助）

### （3）《歌舞伎》 回り舞台を発明したのは大阪の歌舞伎

歌舞伎は近世初頭に京都で生まれた。間もなく大阪へ、江戸へ伝播、三都で栄える。そのうち京都と大阪を併せた上方と、江戸の双方で、それぞれの土地柄にあった芸風が発達、上方歌舞伎と江戸歌舞伎が完成される。

上方歌舞伎の演目には、和事や御家狂言（お家騒動物）、男伊達活躍する侠客物などが生まれ、さらには同じ上方生まれの文楽から移入した丸本歌舞伎（義太夫狂言）も発展する。

上方では、元禄期を境に大阪が経済都市として発展したことにより、歌舞伎興行の中心は大阪へ移った。大阪人の創意工夫の精神は、歌舞伎の舞台機構にいくつもの新機軸を生み出していく。

1758年に登場したのが回り舞台。作者の並木正三が場面転換をスピーディーにするため、舞台を盆状に切り込んで回転させることを思いついた。それまでは一旦幕を閉めてセットの変換を行っていたが、これによって、物語の進行をとめることなく、たちまちにして別のシーンへと移行することが可能になった。世紀の大発明は道頓堀の角座で完成されたのだ。

その他、舞台の一部を上下移動させる、せり上げ、せり下げ、なども正三によって考案された。観客を楽しませるためのアイデアを追求し続けた大阪の演劇人たち。その技法は、今や伝統芸能だけでなく、現代演劇の舞台でも用いられ、また、日本だけでなく海外にも普及している。

経済が成熟した十八世紀後半から十九世紀前半に上方歌舞伎は最盛期を迎える。当時の代表的な名優である三代目中村歌右衛門と二代目嵐吉三郎を中心に充実した舞台がくりひろげられ、それを応援するファンたちとともに文学や美術も含めた高度な文化サロンが形成された。

近代になると、初代中村鴈治郎や二代目実川延若が現れて、大阪を代表する

役者として活躍。上方歌舞伎黄金時代を現出した。上方歌舞伎は戦後、衰退を余儀なくされた時期があったが、1990年代初頭の歌舞伎ブームもあって、復興への歩みを続けている。

歌舞伎は世襲制を採っているが、上方ではそれだけでなく、文楽の世界と同様に実力を重視することを怠らなかった。元禄年間に江戸で荒事を完成させた市川團十郎の芸と名跡が、連綿と現在の十二代目團十郎にまで受け継がれてきたのに対し、同じ時代に上方で和事を大成した坂田藤十郎の名跡は三代目以来、途絶えていた。今回、231年ぶりに上方歌舞伎の象徴とも言うべき坂田藤十郎の名前が中村鴈治郎によって復活された。家系にはこだわらず、芸を、精神を受け継ぐ襲名だ。

道頓堀にはかつての五座に代わって松竹座が歌舞伎の殿堂として存在している。ここでは、毎年七月に「関西・歌舞伎を愛する会」の公演が催されているほか、四月には歌舞伎の普及と若手の研鑽を目的とした三部制の「浪花花形歌舞伎」もスタートした。松竹が後継者育成のために設立した「上方歌舞伎塾」出身の俳優たちも順調に育っている。



〔写真〕 坂田藤十郎

#### (4) 《地 歌》 三味線音楽は堺から発展した

三味線といえば、現在では日本の伝統音楽で用いられる楽器の代表的存在である。だが、実際には、三味線の歴史は他の楽器に比べて新しい。太鼓や笛、弦楽器でも箏（琴）や琵琶が、原型が雅楽の昔にまで遡れるのに対し、三味線が日本音楽の世界に登場したのは近世になってから。

沖縄で今も使用されている三線（さんしん、蛇皮線とも）が堺港から本土へ伝わったのは16世紀の中頃、戦国時代後期のことだった。それを大阪人が改良した。ヘビの皮に代えて猫の皮を張り、爪弾きではなく撥を用いて、より幅広い音色を表現することを可能にした。

さらに大阪人は、棹や絃、撥の大きさ、太さを変えることにより、異なる種類の三味線音楽を生み出した。中間の高さで弾き、歌うのが地歌、太く大きな音で弾き、低く語るのが浄瑠璃（義太夫節）。後に高い音を利用した長唄が江戸で生まれ、浄瑠璃のバリエーションとして常磐津や清元、新内なども派生。三味線音楽は近世江戸時代に大流行した。

積極的に新しいものを取り入れ（「物の始まりみな堺」と言われた港まちの特性）、さらにそれを工夫して改良する精神が新たなトレンドを生み出す。三味線はその象徴だ。

以来、大阪では地歌がお座敷の、人形浄瑠璃・文楽が舞台の芸能として、それぞれ発展した。また、地歌は上方舞の伴奏音楽としても用いられた。まちには趣味として楽しむ人のための稽古所（教授所）も誕生。箏曲、舞は大阪女性の嗜みとして必須のものとなっていくた。

谷崎潤一郎は関西へ移住後、大阪市井の人びとの暮らしぶりを作品の中に描いたが、代表作である『細雪』や『春琴抄』がよくその様子を伝えている。谷崎に地歌を教えたのが大阪の菊原琴治検校だった。その系譜をついで、今も菊原家を初めとする多くの演奏家が活躍している。

打楽器のように激しく打ち鳴らす津軽三味線とは趣を異にする、はんなりと繊細に、また艶冶に響く地歌のよさを知ってほしい。

#### (5) 《上方舞》 優美で上品でユーモラスな大阪

江戸では、官許の劇場である大芝居とそれ以外の劇場である小芝居で歴然とした格差をつけていたが、大阪では大芝居と中芝居とに交流があった。近世中・後期を代表する上方歌舞伎の名優、三代目中村歌右衛門は大立者の子として生まれ、子供芝居で修業。そこで出会った俳優を自らの振付師（演出家）として抜擢。彼は独立して山村友五郎と名乗り、同時に上方舞・山村流を創始して、初代家元になった。

同じ日本舞踊でも東の踊りに対して上方は舞。能の仕舞にも似てすり足で、旋回を基本的な動きとする優美で上品な芸能だ。上記、山村流以外にも大阪には榎茂都流、吉村流（現在の家元は東京在住）などの流儀がある。

作品には男女の恋模様を描く「艶もの」、能の作品を取り入れた「本行もの」おめでたい「祝儀もの」、動物を主人公にしたユーモラスな「作もの」などがあ

る。かつては花街で、また家庭で、多くの女性たちによって舞われた。地歌箏曲と並んで、女性文化の代表だった。

優美で上品でユーモラスな芸能文化としても、上方舞の存在価値がある。



〔写真〕 上方舞山村流六世家元・山村 若（地歌『江戸土産』）

#### （6）《落 語》 庶民が伝える生き方の知恵

落語は、近世初頭に大阪、京都、江戸の三都でほぼ同時期に成立した。大阪では、米沢彦八が生国魂神社の境内でくりひろげた話芸が始まりだ。最初は大道のパフォーマンスだったが、後には寄席が生まれ、たくましく生きる庶民自身を主人公にした愉快的な物語が数多く生み出された。

大店に暮らす大旦那や御寮人さん、若旦那、嬢さん、番頭、手代、丁稚さん、また長屋でにぎやかに暮らす愛すべき人びとは、何より生きる知恵に長けていた。お金はなくても生活を楽しむ方法がいくらでもあることを彼らは教えてくれるのだ。

上方落語界には、現在、人間国宝の桂米朝をはじめ、200人を超す噺家がいて切磋琢磨している。2006年には新たに上方落語の定席として天満天神繁昌亭がオープンする予定だ。また、大阪府立上方演芸資料館（愛称・ワッハ上方）では、笑いの芸能や文化に関する資料の収集と保存、展示、関係者の顕彰や公演などの事業を行っている。

## 第2章 伝統芸能を生かしたPR戦略

### 1 大阪の伝統芸能の過去・現在を見つめる雑誌『上方芸能』

総合芸能雑誌『上方芸能』は、1968年、「伝統芸能の発展のために」を旗印に創刊された。当時、経済発展の一方で、上方歌舞伎や文楽が、また各地の民俗芸能が苦境を余儀なくされていた。そこで、大阪から文化の火を消してはならない、関西の芸能文化を守ろうと決意したのである。

現在では能・狂言、歌舞伎、文楽、日本舞踊、上方舞、邦楽、現代演劇、歌劇、落語、漫才など、幅広いジャンルを毎号取り扱い、一読すれば古典から現代まで、上方発のさまざまな芸能に触れることができる。

毎号特集を組み、大阪・京都・神戸を初めとする「上方（関西）」のあらゆる地域を対象に、各地に息づく「伝統芸能」と「現代の芸能」を、評論やエッセイ、レポートなどを通して伝えている。また、連載記事に、舞台評、公演記録、芸能資料の翻刻、紹介などを掲載して、関西の伝統芸能の活性化に一役かっている。

### 2 大阪の伝統芸能を日常の中に

ここ数年、大阪の伝統芸能にはニュースが絶えない。歌舞伎界では2005年、中村鴈治郎が231年ぶりに坂田藤十郎を襲名し、落語界では2006年に天満天神繁昌亭が開館する。また、能楽（2001年）、文楽（2003年）、歌舞伎（2005年）はユネスコにより世界無形文化遺産に登録された。

大阪にはこのようにたくさんの伝統芸能が息づいているにもかかわらず、人々にはあまり馴染みのないのが現状だ。例えば、日本人が最も好んで見るドラマ『忠臣蔵』は、現在も文楽、歌舞伎、さらには現代演劇、舞踊、落語、講談、映画、テレビなどで上演されている。それを生み出したのは大阪の文楽であり、道頓堀だったことは、あまり知られていないのではないか。これをもっとPRしたい。さらには、知名度と人気度の高い豊臣秀吉を、文化振興の先駆者としてひとつのキーワードにすることで、大阪城見学とセットにしたレクチャー付きの能楽鑑賞会等も企画できるだろう。

伝統芸能と聞くと敷居が高いように感じるかもしれないが、先人のように、人々が日常生活の立ち居振る舞いに必要な行儀やたしなみを自然に身につけるような気持ちで、気軽に謡曲や仕舞、地歌や上方舞に親しむ機会があれば、大阪の伝統芸能はもっと生き生きとしてくるだろう。コンサートに行く感覚で、歌舞伎や文楽の舞台に触れることができるようになれば、支持層の拡大にもつながる。

また、伝統芸能を観光資源としてだけではなく、学校教材として活用し、次世代の継承者や愛好家を育成することも必要である。現在、大阪府立東住吉高校の芸能文化科では伝統芸能がカリキュラムに組み込まれ、その指導にそれぞ

れ活躍中のプロが当たっている。こういった環境づくりをこれからさらに広げていきたい。

〔まとめ〕

秀吉の能楽愛好、復興を出発点に、大阪の芸能文化は近世年間、町人、市民を主人公に生まれ、守られてきた。

近代になって、大阪は新派や喜劇専門劇団を生み、新国劇を育てた。兵庫で生まれた宝塚歌劇も大阪で上演することで知名度を高めた。大阪は新しいものを生み、受け入れ、育てることに長けている。

大正年間の一時期、文楽と上方舞が衰退した時期があった。その復興に立ち上がったのも市民たちだった。季刊雑誌『上方芸能』もまた、民間の立場で上方の伝統芸能をはじめとする芸能文化の発展と、その市民への広がりを目指して、1968年以來、発行を続けている。

お笑いだけではない、大阪の懐の深さを、伝統芸能を通して強くアピールしていくことが重要である。



〔写真〕 国立文楽劇場外観

## 〔資料〕各芸能の概要

以上に述べてきたブランド資源としての、また、PR 戦略の素材としての伝統芸能について、概要を次にまとめる。

### 【能 楽】

中世初頭に大和猿楽出身の観阿弥、世阿弥父子が京都に進出、室町幕府三代将軍・足利義満の庇護を受けて、高度に洗練された舞台芸能として大成させた。能と狂言とが一对となって能楽を形成している。能は主に悲劇を描き、仮面劇で音楽劇。狂言は喜劇を描き、直面劇で台詞劇。国指定の重要無形文化財で、2001年にユネスコから世界無形遺産の宣言を受けている。

### 【文 楽】

語り物音楽の浄瑠璃と人形操りの芸能が合体して近世初頭に大阪で成立した。物語を語る太夫、演奏を担当する三味線弾き、人形を操る人形遣いの三業が一体となって表現する総合芸術。歴史ドラマを描く時代物と、町人社会を扱う世話物、さらには舞踊劇の景事で構成されている。国指定の重要無形文化財で、2003年にユネスコから世界無形遺産の宣言を受けている。

### 【歌舞伎】

風流踊り、ややこ踊りから発展して、近世初頭の京都でかぶき踊りが誕生。その後、演劇を主体とした歌舞伎として確立。大阪や江戸へも派生して三都で栄えた。元禄年間には江戸の荒事に対し、上方では和事が流行。以後も、幅広いレパートリーが生まれ、庶民文化の主軸となった。国指定の重要無形文化財で、2005年にユネスコから世界無形遺産の宣言を受けている。

### 【地 歌】

三味線の改良によって、近世初頭に大阪で生まれた歌い物音楽。琵琶奏者の沢住検校が完成させた。初めは既存の詩歌に曲をつけていたが、やがて独自の歌詞が生まれるようになって、数多くの楽曲が制作された。江戸時代には盲人の音楽として伝承され、箏、胡弓、尺八との三曲合奏の形式でも楽しまれた。上方舞の地としても演奏される。国指定の重要無形文化財。

### 【上方舞】

近世後期に上方歌舞伎の振付師だった大阪の山村友五郎や小川理右衛門が、舞の部分を独立させて流儀を樹立したのに始まる。江戸の踊りが劇場で行われ、跳躍を伴って派手なのとは異り、摺り足や旋回によって優美で上品な振りを、しつとりと表現するところに特色がある。本来はお座敷の芸能だが、近年は劇場やホールでも披露されている。国指定の重要無形文化財。

### 【落 語】

近世初頭、大道で行われた辻ばなしから発展して、やがて寄席で興行されるようになった、笑いをテーマとする話芸。江戸が人情噺を主流とするのに対し、上方は滑稽噺が中心。鳴り物やお囃子が賑やかに入るのも、大阪落語の特色だ。戦前は、漫才人気に押されて低迷した時期もあったが、1960年代の後半には、みごとに復活した。古典落語が国指定の重要無形文化財。

〔伝統芸能パネル構成メンバー〕

※敬称略

〈座長〉

雑誌『上方芸能』代表・立命館大学教授 木津川 計

〈委員〉

雑誌『上方芸能』編集長・立命館大学教授 森西 真弓

雑誌『上方芸能』編集次長 広瀬 依子

(有) あゆみコーポレーション代表取締役社長 加藤 敏躬

演芸評論家 中島平八朗

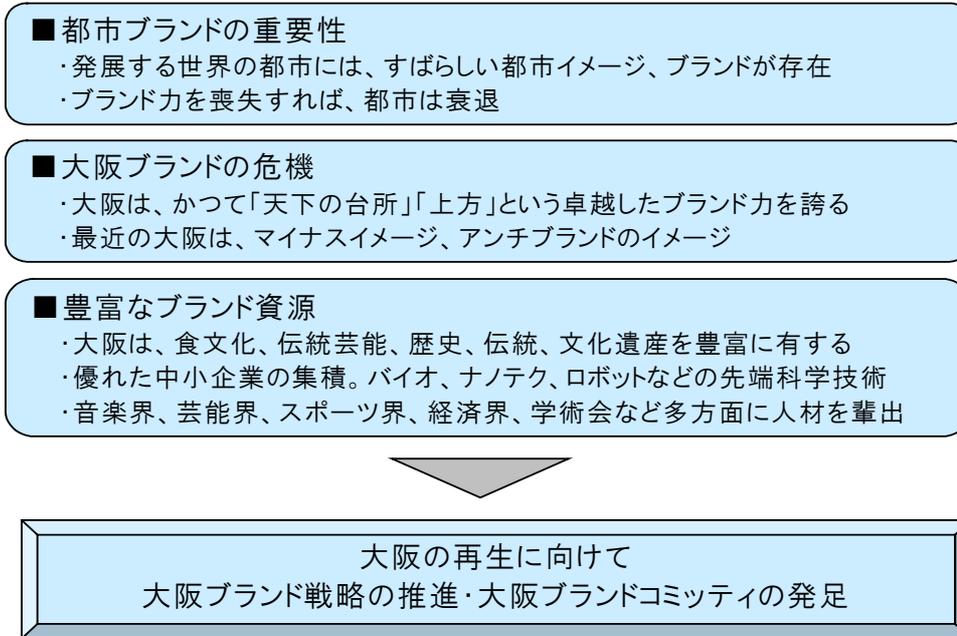
元薬業年金会館館長 井澤 慎治

〈事務局〉

雑誌『上方芸能』編集部 米田 朋子

## 【参考】 大阪ブランド戦略について

### 大阪ブランドコミッティの設立趣旨～大阪に吹く新しい風 Brand-New Osaka～



### 大阪ブランド戦略の概要

#### 「大阪ブランド戦略」の意味

大阪という言葉から連想される良いイメージ(ブランド＝都市魅力)を回復、向上、確立し、情報発信する活動。  
(大阪が自信と誇りを取り戻し、新たな発展に向かう気概を内外にアピールする運動)

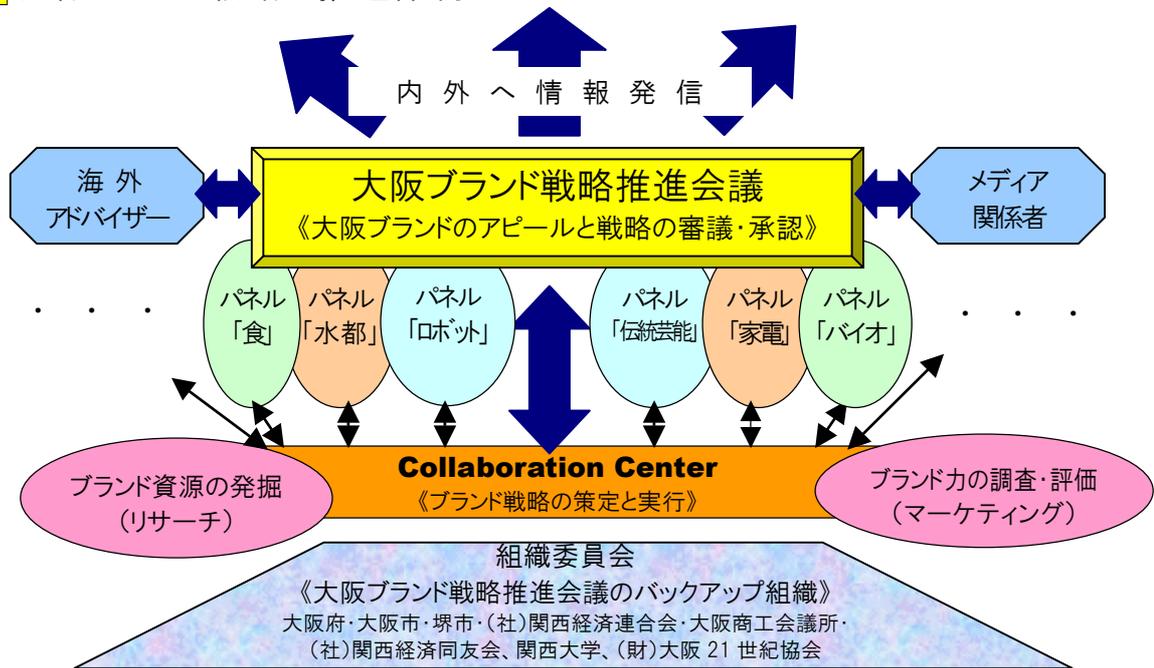
#### 目的

大阪ブランド戦略の目的は、「大阪の再生」。  
新たな大阪のイメージ<Brand-New Osaka>を創出、定着させ、人、もの、資金、情報、企業を呼び込むことで、「大阪の再生」を目指す。

#### 活動内容

- 大阪を知る  
大阪の魅力をアピールできる歴史・伝統・文化遺産、優れた技術・企業・人材などを「ブランド資源」(大阪の強み)として発掘又は再評価する活動。
- 大阪を磨く  
「ブランド資源」について、価値の明確化、新たな魅力の付加等により、その魅力を増大させる活動。
- 大阪を語る  
「大阪ブランド」を統一的消息として、国内外に向けて戦略的に発信する活動。

## 大阪ブランド戦略の推進体制



## 大阪ブランドコミッティにご協力いただいている方々

### 大阪ブランドコミッティ

#### 【大阪ブランド戦略推進会議】

- 議長 安藤忠雄氏(建築家・東京大学名誉教授)  
コシノヒロコ氏(デザイナー)  
坂田藤十郎氏(歌舞伎俳優)
- 顧問 梅棹忠夫氏(国立民族学博物館顧問)  
大久保昌一氏(大阪大学名誉教授)  
岸本忠三氏(大阪府特別顧問)  
宮原秀夫氏(大阪大学総長)
- 委員 専門家、有識者、文化人など約100名

#### 【コラボレーションセンター】

- チーフ 堀井良殷氏((財)大阪 21 世紀協会理事長)

#### 【組織委員会】

- 委員長: 熊谷信昭氏((財)大阪 21 世紀協会会長)
- 委員: 太田房江氏(大阪府知事)  
關 淳一氏(大阪市長)  
木原敬介氏(堺市長)  
河田悌一氏(関西大学学長)  
秋山喜久氏((社)関西経済連合会会長)  
野村明雄氏(大阪商工会議所会頭)  
寺田千代乃氏((社)関西経済同友会特別幹事)